

学級・ホームルーム担任のための

教育相談 第3集

「緘黙」の理解と指導

栃木県総合教育センター

ま え が き

教師や親の願いは、児童生徒の一人ひとりが学校生活に適応し、確かな学力を身につけ心豊かな人間として成長することにある、学校における教育の目標はそのことをいかに援助することができるかにあります。

また、最近の傾向として登校拒否などの非社会的問題行動が増加しております。このような現状を考えると、今後益々教師が児童生徒一人ひとりの心の発達を理解し適切な援助・指導をしていくことが大切になってきます。そこで今回の「学級・ホームルーム担任のための教育相談」では緘黙児の理解と援助指導のあり方について取り上げてみました。緘黙症については数が少ないので症児を担当する機会がなかったり、あるいは実際に担任しても学校で喋らないだけで他は別に問題はないと見過ごされてしまったりするなど、教育現場で理解されていないことが多いのではないかと思います。

緘黙症の児童生徒は喋りたくないのではなく、特定の場所や人に対し、何等かの心理的要因によって極度の緊張や不安感から、喋りたくても喋れなくなってしまうのです。その結果、毎日学校で誰とも話ができず、相手に自分の気持ちを伝えることもできず苦しんでいるのです。

このような子どもたちにわれわれ教師や親はどのように対応していったらよいのでしょうか。この冊子を緘黙児の援助・指導のみならず、すべての児童生徒の豊かな心の育成や、明るく活気のある学級・ホームルームづくりに役立てていただければ幸いです。

平成 3 年 3 月

栃木県教育研修センター所長

新 江 敏

は じ め に

学校における児童生徒指導の基本は、教師と児童生徒、児童生徒同士、教師と保護者、保護者と児童生徒のそれぞれの心と心が太い絆でむすばれていることです。

場面緘黙の児童生徒は家では喋っていても学校では喋ることができず、自分を表現できないため教師や友だちと十分なコミュニケーションを持つことができません。

本書は、学級・ホームルーム担任に視点を置き、緘黙が生まれる背景や、緘黙児やその親にどのようにかかわったらよいか、また、具体的にどのように援助・指導したらよいかわかりやすく説明しています。利用に便利なように小冊子にまとめてみました。

本書の作成者

高 橋 捷 之	副主幹
手 塚 光 善	指導主事
大 島 恭 一	指導主事
伊 澤 成 男	指導主事
関 谷 茂	教育相談員
加 来 裕 康	教育相談員

目 次

まえがき

1 緘黙についての基本的な理解

- (1) 緘黙とは 1
- (2) 緘黙の背景と要因 3
- (3) 緘黙児の理解と診断のために 4

2 学校における援助・指導の実際

- (1) 教師の基本的な心構え 9
- (2) 緘黙児とのかかわり方 10

3 緘黙児の親とのかかわり方と家庭への援助

- (1) 〔タイプⅠ〕の場合 13
- (2) 〔タイプⅡ〕の場合 14
- (3) 〔タイプⅢ〕の場合 15

4 専門機関との連携18

引用・参考文献

あとがき

1 緘黙についての基本的理解

(1) 緘黙とは

「ことばをしゃべらない状態をいう。その原因には、ろう、重度の知能障害、心因性のものなどがあるが、一般に緘黙というと心因性のものをさすことが多い。それはつねにしゃべらないのではなく、一定の場面でしゃべらないもので、場面緘黙ともいわれる。子どもの場合は、家では話をするが学校では話さないという学校緘黙がほとんどである。……」(国分康孝編 『カウンセリング辞典』より)

緘黙をその原因から分類すると、次のようになります。

- ア 器質的障害による緘黙……先天的に、あるいは後天的に、中枢神経系や聴神経などに障害や異常などが認められるもの。
- イ 機能的障害による緘黙……知能が低いことや、小児精神分裂病、自閉症などが原因として考えられるもの。
- ウ 言語発達の遅滞による緘黙……両親との話合いが不足していたり、発言することに対しての動機づけが不足していたりすることなどが原因として考えられるもの。
- エ 心理的原因による緘黙（心因性緘黙）……何か大きな心の傷（心理的外傷）を受けた体験や、発達の未熟な段階への後戻り（退行）などの心理的な要因に基づき、特定の場面で話せなくなるもの。

緘黙である子どもを緘黙児といいます。緘黙児のほとんどは上記のエの場合です。一般に言葉数が少ないことを寡黙といいます。それに対して緘黙というのは、言葉の少なさによって、本人が極端に不自由さや緊張を感じたり、生活のある場面において行動に支障をきたしたりするようなものを指します。そういった心因性緘黙児については、周囲の者から見ると、言葉をしゃべらないという現象だけが見えることも多いのですが、本人自身にとっては、声を出したくても声が出ない、口をききたくても口がきけない、話をしたい気持ちはあるのだが話をすることができないのです。口を開こうとしたり、ものを言おうとしたりすると、緊張して言葉がのどに詰まったようになってしまい、言葉が出てこないのです。声帯が緊張のために硬直してしまうのです。緊張の度合によっては、硬直するのが声帯だけにとどまらず、手や足の筋肉、さらには全身の筋肉にまで及ぶこともあります。そうになると緘黙児の体の動きは、まるでロボットが動くようにぎこちなくなってしまう。ある特定の場所、ある特定の人との対話場面において、不

安・緊張が異常に高くなり、それが生理的、肉体的な面にまで著しい影響を与えてしまうのです。

〈心因性緘黙児の特性〉

(ア) 言語能力は獲得している。

通常の言語理解やコミュニケーションができる能力は、すでに獲得している。

(イ) 発言をしないので学習が遅れてしまう場合もある。

すべての教科が発言・応答など積極的な言語表現を必要とするので、持てる能力を十分に発揮できないことがある。

(ウ) 発言をしないので対人関係がスムーズでない場合がある。

友人ができにくい、先生とのコミュニケーションも十分にはできないなど、社会的な面の交流がスムーズでないことがある。

(エ) 体の動きがぎこちなくなると体育や運動面にも不適應をきたすこともある。

(オ) 年齢に比して、人格的に未成熟な面が見られることもある。

自主性の欠如や自己統制力の不足が見られたり、非協調的・非社会的で、消極的・依存的になることもある。

* 緘黙についての研究 *

ふつう緘黙症といえは選択緘黙または心因性緘黙といわれているものを意味します。家族や親しい仲間あるいは小さな集団内の対人関係では問題がなくても他の場面ではほとんど話をしない場合をさします。

緘黙児を最初に取り上げたのは、ドイツのトラマー (Tramer, M.) で1934年のことです。

日本における緘黙児の出現率は、幼稚園児に関しては東京都における実態調査 (深谷和子ほか, 1970) によれば0.47%で、男女による性差はみられません。小学生に関しては、前橋市における実態調査 (内山喜久雄, 1958) によれば0.19%, 兵庫県但馬地区での調査 (但馬児相, 1967) では0.44%で、ともに男子より女子に多い傾向が指摘されています。次に、中学生については、上記の兵庫県での結果から0.29%となっています。

これらの実態調査から、全体としては年齢が上昇するにしたがって症状が消失してゆく傾向が見られますが、調査の地域、調査時期などにより多少ずれがみられることも考慮しなければなりません。

(2) 緘黙の背景と要因

ア 家庭における背景と要因

家庭の中に次のような家族関係や家庭環境がある場合に、それらが緘黙の背景や要因となる場合があります。

- (ア) 母親を中心とした家庭の人間関係の中で、子どもと親との心の交流の乏しさが、共通の背景として見られることも多いものです。母親が物静かな場合には、子ども自身も言語による母との交流が少なく、消極的な傾向を生じやすくなり、母親が積極的・活動的な場合には、子ども自身がそのテンポについていけずに、消極的で引っ込み思案な子になってしまうといったことがあります。
- (イ) 家庭における養育態度が子どもにとって一貫性を欠いた形になっている時、例えば母親自身の養育態度の中に溺愛と拒否という相反する二つの感情（アンビバレンス）がある時、母親と父親の養育態度の間に溺愛と拒否というアンビバレンスがある時、両親と祖父母の養育態度の間に溺愛と拒否というアンビバレンスがある時、その矛盾が子どもにとって二重拘束（ダブルバインド）となって、子どもの心に心理的葛藤が起きたり、情緒的に不安定となったりして、養育者に対する不信感や自信喪失が起こりやすくなります。
- (ウ) 家庭の雰囲気が明るさや暖かさに欠けていたり、他の人との社会的交流が少ないような場合、子ども自身の行動も消極的で、引っ込み思案なものとなる場合があります。
- (エ) 両親が共働きで、幼い頃からたらい回しのようにして他人に育てられ、子ども自身が親に対して基本的な信頼感を持ってない状態で育ってしまった時
- (オ) 子どもに過剰な期待、過剰な情熱で、「いい子、できる子、自慢の子」を強制し、子ども自身が徐々にその期待にそえなくなり、次第に劣等感にとらわれてきたような時
- (カ) 親の態度や言葉遣いの中に、絶えず他人や兄弟姉妹との比較があり、いつも本人が親から「ダメな子」として疎まれ、無視され、自分の存在感がさっぱり自覚できないような状態である時
- (キ) 家庭不和、特に夫婦仲が円満でなく、子どもが情緒的安定性を欠いている時
- (ク) 親または兄弟の中に緘黙であった者がいたりした時
- (ケ) 幼児期に、言葉や意志を表明することを抑えられたりしたような時、例えば、隣近所の人々の迷惑にならないように無理やり黙らされた、などの場合

イ 家庭の外における背景と要因

同年齢層との接触経験が乏しいまま幼稚園・保育所や小学校の集団生活に入ったとき、不適応を起こすことがあります。たとえば、近所に遊び友達がなく、一人遊びがほとんどだった場合とか、近所の子どもたちと付き合いを十分にしなかった場合などで突然幼稚園・保育園や小学校などで他の子どもたちと一緒に遊んだりすることを要求されたりした時などです。その時の不適応現象の一つとして、緘黙といった症状を現すことが考えられます。

ウ 本人における背景と要因

緘黙児の性格傾向として一般に認められるものは、内向的で神経質、繊細で感受性が鋭く、非常に傷つきやすく、劣等感を抱きやすいといったことです。そのため外界に対して臆病になり、恐怖心や怯えといったものを抱き、社会性が育ちににくく、家にこもる内弁慶で甘えん坊となりやすいのです。また、物事に対しては生真面目で几帳面、完全主義であり、対人関係においては、引っ込み思案で人見知りをするためうまくいかず、行動も緩慢になりがちで、孤立する傾向を生むことにつながります。その他にも、学業の遅れ、耐性の弱さ、始語の遅れのような傾向が見られることがあります。

(3) 緘黙児の理解と診断のために

ア 児童生徒の理解と問題の把握

緘黙児に限らず、問題を持つ児童生徒を指導するにあたり、共通していえることは、まず児童生徒のどこに問題があるのか、そして何が問題なのかをとらえ、次に必要としている援助は何か、またどのようにしたら適切な援助ができるのかを考えることです。

そのためには、それぞれの特徴をもつ児童生徒を正しく理解することから始める必要があります。ところが、個人とか人格といわれるものは、きわめて複雑で、その現れ方も様々であり、理解するのには困難が伴います。そのため、理解をするに先立って児童生徒に関する資料・情報を収集することから始めなければなりません。児童生徒の理解において必要と思われる資料・情報としては、能力・性格的特徴・興味・関心・要求・悩みなどの問題や、個人を取り巻く環境条件・交友関係などがあげられます。能力の問題には、知能・学力・運動などが含まれます。また性格の傾向を知ることは、児童生徒指導のための手がかりを与えてくれるとともに、さまざまな問題の診断にも役立ちます。興味・関心等にしても同様です。交友関係の把握も、集団の場で

学習し生活している児童生徒の理解の上で欠かすことのできない事項です。児童生徒を取り巻く環境の問題にしても、物理的・客観的な条件だけでなく、家族の人間関係や家庭の雰囲気などの心理的な条件まで把握することが必要であり、これらを見殺しにして、正しい理解や充実した指導を期待することはできません。

イ 理解のための基本的な資料

個人を正しく理解するためには、どのような資料が必要なのでしょう。緘黙児に対する教育相談など、指導を進める上で必要な資料をいくつかあげてみます。

(ア) 指導要録に記載されている一般的な資料

(イ) 家庭環境についての資料

(例 家庭内の人間関係、家庭の雰囲気、本人に対する親の心理的な認知など)

(ウ) 情緒的な問題や習癖についての資料

(例 幼児期に泣くことが多かった、爪をかむ癖があったなど)

(エ) 友人関係についての資料

(例 友達が少なかった、いじめられることがあったなど)

(オ) 身体健康状況等についての資料

(病歴、体位など個人の健康などに関するもの)

(カ) 学校生活についての資料

(学業成績、出席状況、生活の様子など)

(キ) 検査や調査の結果についての資料

(知能検査、学力検査、性格検査、悩み調査などの結果)

以上、基本的な資料に関して主だったものを簡単に記しましたが、あまり資料を収集することにこだわると、資料を整理することだけに追われてしまい、これらの資料を児童生徒の理解のために活用することができなくなってしまう恐れがあります。したがって、理解や指導のためにはどの資料が必要であるか、よく検討して収集することが必要です。

ウ 正しい理解を得るための方法

緘黙児等を理解・指導するに役立つと思われる資料をあげてみましたが、児童生徒を理解するには、それだけで十分とはいえません。次にこれらの資料をもとに、実際に児童生徒とふれ合いを持ちながら、これまでに得られなかった資料を収集し、児童生徒を理解をすることが必要になってきます。そのための方法にはどのようなものがあるのでしょうか。次にそれらの方法のいくつかをあげてみます。

(ア) 観察法

対象となる児童生徒と深く関わりあいを持ちながら、その行動や活動の様子を細かく観察しながら、その時の気持ちや性格、特徴などを理解していく方法です。ときには遊戯療法などを用いることによって、より深い関係をもつことができ、様々な情報を得ることが可能となります。

この観察の場面としては、休み時間、放課後などの自由な時間や、教室での学習の様子、係活動、クラブ活動などいろいろな場面が考えられます。また見学や遠足、旅行などもよい資料を得ることができる場面です。

観察にあたっては、できるだけ多くの場面とさまざまな機会をとらえて行うことが必要であり、そしてなるべくありのままの児童生徒の姿をとらえるよう配慮することが必要です。また、諸条件をある程度統制して行う観察法もあります。一定の条件を設定して、その条件のもとでの児童生徒の反応や行動を観察して理解する方法です。

(イ) 検査法

緘黙児をはじめ、心理的問題を持つ児童生徒は観察法だけでもある程度診断することができますが、標準検査等を利用すれば、さらに詳細に本人の内面の理解や交友関係などを把握することができます。これは一定の尺度をもつものさしをあて、その児童生徒が全体の中でどのような位置にあるか、どのような心理特性を持っているかを見て、児童生徒を理解していく方法です。このような検査には、知能、情緒、性格、適性、環境などを診断していくための種々のテストがあります。そして検査の利用にあたっては、その特徴を良く理解し、目的に合わせて使うことが大切で、それによって効果的な結果を得ることができます。緘黙児等の理解や指導に利用できる検査には次のようなものがあげられます。

- a ソシオメトリックテスト（日本図書文化協会）
- b S－M社会生活能力検査（日本文化科学社）
- c バウムテスト（日本文化科学社）
- d 文章完成法テスト（金子書房）
- e 性格検査

これらを利用して、その児童生徒の集団内における人間関係や社会性、欲求、葛藤などの状況を調べるのも一つの方法です。

また、田中一ビネー知能検査（田研出版）、鈴木一ビネー知能検査（東洋図書）、WISC－R知能検査（日本文化科学社）などを利用すれば、能力や精神発達の状況を把握できます。なお、標準検査を使う際には、次のような配慮も必要です。

(a) 目的を明確に設定しておくこと。

目的が明確になれば、おのずとどういう検査を選択すればよいかが決ってきます。したがって出てきた結果の整理の仕方や解釈もその目的に対応して決ってきます。まず最初に検査を実施する目的を明確にたてることが大切です。

(b) 利用する検査の特質・性質を理解しておくこと。

目的に応じて検査を選択することになるので、検査全般について理解しておくことが必要になってきますが、特に利用する検査については、十分に調べて誤りなく実施できるようにしておく必要があります。不十分な知識で検査を実施すれば誤りも多くなる危険性があると同時に、検査結果の解釈に間違いもでてくることになるので、利用する検査について十分な研究が大切です。

(ウ) その他

児童生徒の喜び、願い、悩みなどが表れている作文や日記なども、児童生徒理解のための有効な方法の一つです。

以上、緘黙児を理解するためのいくつかの方法を簡単に記しましたが、これらの方法は、いずれも児童生徒のある特定の一側面をとらえる方法にしかすぎません。したがって、いくつかの方法を組み合わせ、相互補足的に用いることが必要になってきます。

エ 資料活用上の留意点

これまでに述べたような方法で得ることができた情報や資料は、次のような点に留意して活用しなければなりません。

(ア) 個々の資料の統合

資料を個人の理解や指導に活用するにあたって最も重要なことは、収集した資料を個々ばらばらでなく、それらを統合して個人の人間像をクローズアップさせ、問題点を明確にし指導に役立てることです。

(イ) 資料を見る目

資料を見る場合、可能な限り自分自身の好き嫌いや偏見等を越えた目で見ることが重要です。一定の枠にとらわれない柔軟な目で資料を見る態度が必要になってきます。

(ウ) 検査結果と観察のずれの追求

検査の結果と観察の結果にずれが生じることはよく見られることであり、当然とも言えることです。このような場合、教師にはその食い違いがどうして起こってきたのか追求していこうとする態度が必要になってきます。

(エ) 指導に結びついた資料の活用

資料をいくら収集し、分析したとしても、それらが指導に結び付かなければ資料の活用にはなりませんし、その子にとって良い指導の方針や方法は生まれてきません。種々の資料を統合して個人の性格を深く理解するためには、資料の活用に意を注がなければなりません。検査や調査をいかに積み重ねても、教師と児童生徒との心の交流がなければ資料は生きてきませんし、指導の効果は期待できません。児童生徒をひとりの人間として大切に扱い、理解するよう努力することが大切です。



2 学校における援助・指導の実際

(1) 教師の基本的な心構え

ア 1対1の気楽な関係をつくること

ことばのコミュニケーションに慣れている者にとって、緘黙児への対応は戸惑いが多いものです。特に口をきかないことだけに注目してしまうと対応にぎこちなさが出てきて気まずくなったり、何かのきっかけを作って話をさせようとする姿勢になりがちです。結果的には逆効果で、子どもを窮地に追い込んだり、閉ざした殻をますます固くすることにもなります。したがってあれこれ最初から話をさせようと働きかけることは避けるべきです。それよりもその子に欠けている対人関係を広げることに目をむけることが先決になります。その子の全体と気楽につき合う雰囲気大切です。特に先生がその子との1対1での気楽な付き合いを心掛けることです。その子にとって学校場面での安心できる味方が必要なのです。学校場面はもちろんですが、それ以外の場合、昼休みや放課後など気楽に一緒にいられる空間を作ることが大切です。できればゲームなど遊びのレベルでの対応が心をなごませます。直接ことばを介さない作業や手伝いも一緒にやることによって立派なコミュニケーションとなります。しかし一方的な強要とならないように時々家庭と連絡をとって、その子の負担になっていないかを確認める配慮も大切です。

イ 自分を表現したい感情に注目すること

自分にとって気を許せる者（両親など）にはよく話をしたりするのですが、不安や緊張を強いられる場面ではことばの表現ができなくなってしまうのですが、決してことばを忘れていたわけではありません。こうした本人の感情を理解するとともに、自分を表現できる条件、つまり、不安や緊張を解く対人関係の確立を基盤に、本人が自分を表現できそうな具体的な手だてを工夫することが大切です。例えば、美術や技術・家庭科の作品を作る過程での自己表現もそのうちの一つです。要は気持ちをほぐし、自分の意志を伝えようとする自然な感情を呼び起こすための援助なのです。

ウ 家庭との協力を大切にすること

緘黙児への援助は本人だけの援助では、なかなかうまくいくものではありません。親は家での本人の様子と学校での様子とのギャップに戸惑いを感じたり、強い不安を感じたりしています。親の気持ちをよく理解した上で、協力体制をとり、問題点を改

善していく必要があります。

- (ア) 養育態度、家庭環境の問題点の把握（具体的な場面で、親との話し合いが大切）。
- (イ) 学校での一日の流れの中での本人の様子を家庭に伝えること。
- (ウ) 学校での働きかけに対する本人の反応を家庭で確かめること。
- (エ) 家庭での具体的な対応を適宜報告や連絡で確かめること。

(2) 緘黙児とのかかわり方

ア 暖かく、気楽に過ごせる学級づくり

緘黙児といわれる子どもたちは、話そうと意識すると心理的緊張が高まり、その緊張が生理的硬直を呼びおこして、「話したくても話せない」辛い状態にいます。そうした心の状態を徐々に解きほぐすには、クラスの暖かい雰囲気がとても大切です。そうした雰囲気は一朝一夕にできるものではありません。子どもたちは日常のクラスの雰囲気から相手に対する思いやりを感じ取り、それを言動の端々に表すものなのです。ふとした言動が相手の心を傷つけるかもしれませんが、またある一言が人をなごませることもあるのです。お互いに助け合って、いいクラスを作ろうとする雰囲気は緘黙児にとっても、他の子どもたちにとっても心の成長に大きな影響を与えているのです。そのためには教師が一人ひとりの子どもをかけがえのない存在として、心からいとおしみ、尊重していく心のもち方が大切となってきます。

イ 人間として大切なことを学ぶチャンス

子どもたちは、クラスという集団で生活をしています。集団の力は時として、弱い者や集団にとって異質と感じられる者に向います。時として「あの子はいつもしゃべらないし、何をしてもダメだ」というレッテルを貼ったり、のけ者にしてしまうこともおこりがちです。そこで集団（クラス）の力がプラスに働くには、教師と子どもとの1対1の関係ができていのかどうか問題です。緘黙児への対応も正に教師との1対1の対応が基本であることは先に述べた通りです。そして一人の学校場でしゃべれない子の内的世界に触れることによって、子どもたち一人ひとり、自分自身の内的世界にも目を向けることになり、人間として大切なものを学ぶことにもなるのです。緘黙児に暖かく、さりげなくつき合う雰囲気は、学級にも自然に連帯感が生まれ質的にも高められていくものです。

ウ 集団への適応をはかるためには

- (ア) 教師との1対1の接触を多くすること。
- (イ) 教師と緘黙児とに親密な関係が成立したら、それを基盤にしてもっとも親しみや

すい友達を一人加えて三者関係をつくること。

(ウ) 徐々に人数を増やしていくこと。

けっして無理をせず、本人が気軽に付き合えることを基本とすること

＜留意点＞

あまりにも面倒見のよい子どもとの関係がかえって本人の自尊心を傷つけ、集団に入っていけなかったり、依存的になったりして本人の発達が妨げられることもあることに留意する必要があります。

エ 成功感、存在感を持たせる工夫を

緘黙児がことばを発するには、生活の様々な面で自信をつけさせることが大切です。それには授業やその他の活動場面で「できた」という成就感や成功感が重要な意味を持ててきます。そしてそのことがみんなの役に立った場合は、クラスでの存在感を持つことができます。ここで自信を持たせるための工夫をアトランダムに上げてみます。

＜心がけること、配慮すること＞

(ア) 毎日、少しずつでも子どもたちとのふれ合いを持つこと（幼児や小学校低学年児へのスキンシップ）

(イ) 返事を期待せず、話しかけること

(ウ) 教科書の朗読など順番にしたときは、本人を絶対にとばさないこと

「今後読めるようになったら頼むね」などの言葉掛けをすること

(エ) ノートなどの意志疎通が図れる場合、書いてきたことに返事をするとか、コメントをするなどの工夫をすること

(オ) ノートなどに書かれてある意見などはさりげなくとりあげるようにすること

(カ) 得意なこと（スポーツなど）はできるだけ出番を多くすること

(キ) 授業中にも冗談などを言うゆとりを持ち、クラス全体に話しやすい雰囲気をつくること

(ク) できるだけほめることを多くし、いらいらした叱り方をしないこと

(ケ) 本人にできそうな係、責任をあらかじめ与えること

(コ) 電話なら話ができる子もいるので、うまく活用すること

(サ) 折をみて家庭に出向くこと（親しみを増すことに力点を置くこと）

オ 学校での援助・指導、連携

(ア) 学年教師相互の連携

学年会など各学級の情報交換、協議、連絡の時に緘黙児に対する配慮やその時の状態などを話し、他の教師の理解を求めることが大切です。特に授業中における配

慮事項については丁寧に話をして、具体的な場面で分かってもらう必要があります。できれば事例研究会などで十分に時間をとって基本的な対応の仕方やその子への関心や理解を深められれば一層効果的です。

(イ) 養護教諭との連携

養護教諭の一つの役割・機能として、子ども達が評価を意識せず、気軽に話したり、訪れたりできるイメージがあります。そうした役割・機能を十分生かして、情報交換を行い、場合によっては、本人が学校場面で安心していられる「場」として保健室を十分に活用することが大切となってきます。



3 緘黙児の親とのかかわり方と家庭への援助

まず、学校で喋らない子どもに気付いたら、家庭と早く連絡をとる必要があります。それは、場面緘黙の子どもは、口数は少ないけれども家庭では普通に話をしていることが多いので、親は我が子が学校で話をしないことに気付かない場合があるからです。次に、緘黙症についての正しい理解と対応のしかたについて、家庭や専門の相談機関と連携をとりながら、早い段階からそれぞれの症状に応じた適切な対応をしていくことが大切です。早期に気付いても、親が、家では話をしているのだから学校でもそのうち喋るようになるだろうと放置したり、家では喋れるのだから学校でも喋りなさいと叱りつけていたり、学校では理解のない先生が何とかして喋らせようと誤った対応を繰り返したりすると、子どもの心は緊張や恐怖心から益々殻の中に閉じ込められてしまい、長期間にわたる緘黙の状態が続くことになります。

そこで、緘黙症のタイプと、それぞれのタイプに応じた家庭への援助について考察してみました。

まず、緘黙症の子どもへの援助においてどのタイプにも共通して言えることは、言語の能力は有しているが家庭以外の場所や人に対し、喋りたくても極度の緊張や不安感から声帯が収縮して声が出せないのであることを理解し、学校や家庭において無理に声をださせようとしなことが大切です。

(1) 〔タイプⅠ〕の場合

家庭では比較的口数も多く、頑固でわがままであったり、常に自分が中心となって行動し、他の家族の話はあまり聞こうとしないで一方的に喋る場合が多い。家族以外の人に対しては全く喋らないが、人なつこく様々な表情や行動で自分に関心をもってもらおうとする。話はしないが自分を目立たせたいという気持ちがあり、他の人とのつながりを持ちたいという意欲が見られる。家庭外において自分が苦しく、不利な立場に立たされると、自分を守り、自分の存在を主張するために意識的に沈黙をしている。喋ってしまうと、他から注目されなくなってしまうという不安がある。

「家庭での対応」

ア 幼児期において両親が仕事等で忙しく、祖母が子育ての中心になっていて、父親が祖母に依存的であったり、母親が仕事におわれて子どもとの十分な接触を持ってない場

合が多い。子育ての中心が父母となるよう変えていく必要がある。

イ 家庭における家族間の絆を深める。具体的には、家族で遊園地や公園、デパート等にでかけいろいろな経験をさせたり、家でトランプやゲーム、バドミントン等などをしてできるだけ親子の接触の機会を多くする。

ウ 他の兄弟姉妹と同じように愛情を注ぎ、言葉かけを多くする。

エ 母親が愛情を持って優しくし、自分でできることは自分でやらせたり、あいさつや電話の応対などについてよく教える。

オ 家族以外の人との接触の機会を多くする。具体的には、町内会、子ども会育成会等の行事に積極的に親子で参加したり、親戚に短期間子どもだけで宿泊させたりする。

カ 近所の子ともと遊ぶ機会を多くする。一人では友だちの中に入っていけない事が多いので、最初のうちは母親と一緒に遊んで安心感を与えるとよい。1対1で遊ぶことからはじめ、だんだんと仲間を増やしていく。お互いの家に行ったり来たりして遊ぶことも効果的である。

キ 親は子どもの話すことに真剣に耳を傾け、子どもが安心して長い会話ができるようにする。

ク 家族も治療に積極的に参加して、子どもの変化に柔軟に対応する。

(2) 〔タイプⅡ〕の場合

家庭内でも外でも無口であり、生活全般が消極的で、自ら進んで行動することが少なくエネルギーに乏しい、無気力な生活の手段として沈黙を続けている。自ら積極的に人とのつながりを持つとはしないが、心の中では声をかけられたり関係を持つことを望んでいる。言語の発達が遅れがみられ、自己を主張することが少なく、自主的、主体的に行動することができない。喋ろうとする意欲に欠けた緘黙。

「家庭での対応」

ア 父親が家庭の中心として指導力を発揮する。家族がそれぞれ家庭における役割意識を持つ。

イ 家族団らんの機会を多くして、言語による会話の時間を多くとる。

ウ 家庭内においてお互いが本音でいろいろなことを言い合える様な雰囲気をつくる。

エ 家庭の仕事を責任を持たせてやらせてみる。うまく行かなかった場合はばかにすることなく、何回も試みさせる。子どもが達成できそうな努力目標を決めそれが達成できたときはほめる。

オ 学習面でも子どもの能力に合わせて努力目標を設定し、目標が達成できたらその努

力を認めほめることにより成就感を経験させる。

カ 子どもの話し方や行動がゆっくりしている場合はけっしてせかせることなく子どもが話終わったり、行動が終了するまでゆっくりと待つ。

キ いろいろな事を経験させ自ら興味を持って取り組める事を共に探す。

(3) 〔タイプⅢ〕の場合

家庭の内外において特定の人とだけ選択的に会話をし関係を持ち、沈黙を続けることが自らを守るために安全であると思っている。他の人とのコミュニケーションを避けようとする。

「家庭での対応」

ア 特に、女の子の場合、幼児期において父親からの厳しい叱責や暴力を振るわれたり、無口であることを非難されたり、人間性を否定されるような言葉を言われたりするとそのことが心の傷となって、家庭では母親とは話をするが、父親とは話をしなくなる場合がある。

このような場合には、父親が子どもを一人の人格を持った人間として認め、子どもの欠点を非難したり、世間体を気にしたりする事なくわが子を抱きしめるくらいの愛しさをもって接するようにする。

イ 友人関係も自分の気持ちを先回りしてわかってもらえる人や、優しくしてくれる人、わがままをある程度ゆるしてもらえる人とのみ、つながりをもつことができる場合がある。

また、性格的に几帳面で頑固で攻撃的な面も見られ、友人との間にトラブルが生じる場合もあるので、親が友人との関係がスムーズにいくように援助する必要がある。

ウ 子どもの持っている能力を伸ばし自分に自信を持たせる。例えば珠算、書道、料理、絵画、スポーツ等で自己表現ができるようにする。

エ 学校でも限られた友人とのみ短い会話をする以外ほとんど喋らず、一日中楽しそうに会話をしている仲間を見ながら緊張して過ごしている子どもの気持ちを共感的に理解し、家庭ではできるだけ子どもがゆっくりと安心してすごせるような暖かい和やかな雰囲気をつくるように心がける。

オ 緘黙の状態が長く続き、その学校の生徒達にその学校では話をしないことが知られている場合には、小学校、中学校、高等学校などのそれぞれの段階で自分が緘黙症であることを知られていない、受け入れ態勢の良い新しい環境に変わった方が効果的な場合もある。

以上、それぞれのタイプに応じた家庭での援助の仕方について考察してみましたが、それぞれのタイプであげた対応策はどのタイプにもあてはまるものであり、それぞれのケースに応じて重点のおき方は変わってくるものと思われます。

次に、家庭における一般的な援助・指導の留意事項は次のようになります。

ア 受容的な態度と共感的理解

- (ア) 子ども自身の立場になってその気持ちを理解し、子ども自身をありのままに認めていこうとする態度をとることによって、子どもは心の扉を開いてくれる。
- (イ) 「お母さんと話をするとなんか楽しくなる」と思われるようになること。そのためには、相手の気持ちになってうなずきながら「ああ、そうだったの」などと感動をもって聞いていくこと。

イ 信頼すること

- (ア) 過保護・過干渉に育てられた子は自我の発達が抑えられてしまうので、社会性や自立性が発達しない。
- (イ) 本人を信頼すること。緘黙のことを話題にして、注意したり、叱責したり、話すことを強要したりしたりせずに、必ず話せるようになることを信じ、明るく接することを心がける。
- (ウ) 親子の心の絆がしっかりしてくると信頼が生まれる。親への信頼ができると、その信頼の絆が他の人との信頼の絆ともなり、社会性が発達する。

ウ 愛すること

- (ア) 乳幼児期の“甘えられた”という満たされた思いが、情操を円満にし、調和のとれた人格をつくる。他の兄弟と同じように、愛情欲求を十分に満たしてあげる。
- (イ) 学校では味わえない色々なことを家庭で経験させる。本人が満足し、それで物足りなくなってくれば自然に家から離れ、関心が外に向いていくようになる。
- (ウ) 担任の先生との細かい連絡、連携を欠かさないようにする。

エ 認めること・ほめること

- (ア) 子どもの心は、叱られて育つのではなく、認められ、ほめられて育つ。あら探しの名人になるよりも、わが子の美点という宝探しの名人になれること。
- (イ) ほめられることは、その子にとって「生きていることは楽しい」「生きているって素晴らしいことなんだ」と自覚できることである。感動をもってほめることが、子どもにそういう自覚を与えることになる。
- (ウ) ほめられることによって、子どもは自分の存在感を自覚でき、自分にもよい点がある

ある、自分もやればできると自己認識することが自信を生み、その自信が心の余裕となり、表情も生き生きとして、やがて声もでることになる。

(エ) 親としてうれしことや、喜びを感動をもって伝えたとよい、そのときスキンシップもとれるとさらに効果的である。

大切なことは学校で話したくても話せない子どもたちの心のいたみを共感的に理解し、子どもたちが安心して喋ることのできる暖かく優しく思いやりにあふれた人間関係の見える学級や家庭を作ることではないでしょうか。



4 専 門 機 関 と の 連 携

緘黙の症状が強かったり、登校拒否その他の問題を同時にもっていたりするような難しい事例で、学校での対応に限界を感じるような場合には、専門機関での治療が必要となります。専門機関での治療の方法としては、遊戯療法、箱庭療法、カウンセリング、作業療法等、さまざまな方法が用いられます。

ア 緘黙児に初めて出会った時の担任の驚きと困惑は大変なものだと思います。対応の仕方がよくわからないままに本人に誤ったかかわり方をしてしまうと、よけいに問題をこじらせてしまうことにもなりかねません。やはり緘黙の場合にも、早期発見とともに、早期の、適切な対応が必要なのです。そこで、対応の仕方に自信が持てなかったりいろいろな対応の中で、“困ったな”と思うようなことが出てきたりした場合には、すぐに相談にのってくれる人がいれば安心ということになります。また、担任が学校の内部での対応の態勢を考えたりする時にも、保護者への対応の仕方を考えたりする時にも、相談機関などの活用が考えられます。

イ 問題が起きてから相談機関と連携して対応してゆくことは勿論大切なことなのですが、問題が起きる前から何等かの形で日頃から相談機関とつながりができていると、万一問題が発生しても、その連携がよりスムーズになります。その意味で、日頃から連絡協議会とか、外部で行われる事例研究会などの、関係者の集まる会合などには、なるべく積極的に参加しておくことが望まれます。また、校内での事例研究会などの折に、相談機関の関係者を交えて検討することなども連携に役に立ちます。

〈引用・参考文献〉

- 「情緒障害児の教育 一上—」 全国情緒障害教育研究会編 日本文化科学社
- 「緘黙・いじめ — 正子の場合」 山本実編 岩手大学「障害児」研究室
- 「緘黙への挑戦」 山本実編著 岩手大学教育学部 山本実研究室
- 「無気力・引っ込み思案・緘黙」 坂野雄二著 黎明書房
- 「情緒障害の治療と教育」 内山喜久雄・上出弘之・高野清純編著
岩崎学術出版
- 「自閉症児・緘黙児」 十亀史郎著 黎明書房
- 「児童臨床心理学事典」 内山喜久雄監修 岩崎学術出版
- 「少年期の心」 山中康裕著 中央公論社
- 「学校かん黙」事典 山本実編著 岩手大学教育学部 山本実研究室
- 「現代のエスプリ別冊
子どもの心理1」 大原健士郎編集 至文堂
- 「カウンセリング辞典」 國分康孝編 誠信書房



あ と が き

私達の日常は言葉を媒介としたコミュニケーションが主流をなしています。しかし、言葉のコミュニケーションに慣れきっている私達は、その裏に隠されている精神活動を意識することは少ないようです。

今回取り上げた、話そうと意識すると心理的緊張が高まり話せなくなってしまう「緘黙児」のことは、その面からもなかなか理解しにくいものです。特に留意すべき点は、緘黙児は言葉で話ができなくても、いつも心の中では相手と話そうとしていることです。こうした非言語的コミュニケーションは受け手の感受性にもかかわってきます。

教師と生徒のコミュニケーションの基本的なことがらが、こうした子どもたちに隠されているといっても過言ではありません。この小冊子が先生方の児童生徒への信頼を獲得する一助となれば幸いです。